

# 2010年度連続研究講座： グローバル化時代のリスクを考える 第6回「国家の安全と情報」

2010年12月9日

吉野 準（元警視總監）

## ●対外情報の必要性—情報なくして対策なし

今日は国家の情報の話をしますが、その導入として、情報の視点というお話をまずしたいと思います。

情報は、同じものを見ていても、見る立場、視点によって、見るもの、見方などすべて異なるのです。

たとえば、防犯という観点からの研究で、私が警察にいたときに、泥棒の視点の研究をしたことがあります。

泥棒の物色の仕方を調べるために、元泥棒だった人にアイカメラをつけてもらって調べたのです。泥棒の立場になると、同じものを見るのも、また意味付けも、全然違うことがわかりました。

たとえば、われわれは、ちょっとお金持ちになると家の周りに高い壁を張り巡らして安心します。ところが泥棒は、壁がある方が仕事ができると思うのです。壁を乗り越えるのは身軽な泥棒にはたやすいことで、壁があるほうがかえって外から目立たないのです。

それから、家を見るときに、いつも、万が一の場合の逃げ道を見ていることがわかりました。

それは、泥棒の経験がない一般の人に、泥棒になったつもりで見てもらった場合と比べて、全然ちがうものでした。

ですから、情報というのは、どの立場から見るのかによって変わってくるものです。この原則が、国家の情報でもあてはまります。

最近の日本は情けない。国家の基本ができていない。

国家にとっては情報が第一なのです。

みなさんにおなじみの問題に北朝鮮による一般人の拉致という事件があります。これについても、同じような視点から少し振り返ってみましょう。

北朝鮮の拉致が起り始めたとき、最初のうちはなにが何だかわからなかったのです。いろいろな人がいきなりいなくなりました。家出、神隠し、樹海に迷うなど、いろいろな形で行方不明になる人たちがもともとたくさんいたわけですが、そういうケースとの見分けがなかなかつきませんでした。

1977年 横田めぐみさんが拉致されましたが、それもすぐにそうだとはいえなかったのです。

1978年、アベックが3組、謎の消失をしました。しかし、場所が全国バラバラでした。ただ、海岸でいなくなるということが共通していました。

80年 朝日新聞が、「拉致ではないか」という報道をしました。それで、これはもしかしたらそうではないかということになりました。それまで、拉致だということが分かりにくかったのは、一次情報が欠如していたことと、大きく物事を見る「複眼的思考」が不足していたからです。

一次情報、というのは生の情報、誰が拉致したのかということです。

複眼的思考、というのは断片情報の証拠から推理、分析することです。分析、推理も足りなかったのです。

一次情報を手に入れるためには、情報収集のプロが必要です。そして、複眼的思考の充実のためには、情報分析のプロが必要です。国家

の基本は、「情報を集めること」と「情報を分析すること」です。

### ●情報の種類

国家の情報というものを考えるとき、公然情報と秘密情報の2種類が区別されます。

公然情報（インフォメーション）は、集められたものです、ニュースなど。公然情報も情報機関がきちんと分析して、結論づければインテリジェンスにもなりえます。何かを解決するとき8割、9割は公然情報を使います。

秘密情報〈インテリジェンス〉は公然でない情報で核心に迫るものです。秘密情報をとるために、外国の政府はみんな情報機関を持っています。CIAなど。

秘密情報にはさらにつぎの3種類があります。

「シギント」SIGINT「通信情報」：会話・信号の傍受情報

「イミント」IMINT「画像情報」：衛星・偵察機の画像情報

「ヒューミント」HUMINT「人的情報」：人が人から取る情報。

ヒューマンインテリジェンスのこと、これが秘密情報の中核をなします。

情報〈インテリジェンス〉の中核は「ヒューミント」です。これは、フレデリック・フォーサイスの主張です。

湾岸戦争のころというのと、みなさんは若くて記憶していないかもしれませんが、1990年中東の戦争のことです。それ以前の1970年代と1980年代に電子情報・通信情報の収集技術が発達したことにより、機械装置がつかわれ始め、湾岸戦争のときは、“ヒューミント”つまり人間による情報収集が軽視されるようになりました。そのことへの反省が湾岸戦争の教訓のひとつとされています。

戦争終結の前から分かっていたことでしたが、一定の目的と場所を

対象とする場合、この人類最古の情報収集装置に代わりうる手段はいまだにありません。それは人間の目で集めた情報です。ヒューマンインテリジェンスです。

ナインワンワンの時も同じことをいわれていました。人の手で情報を集めることが重要なのです。

F. フォーサイス「神の拳」(THE FIST OF GOD, 吉野 試訳)というミステリー小説は、ヒューミントというものをじつによく知って書いています。

### ●日本におけるヒューミント実行上の課題

日本には、「スパイ」蔑視の風土がありそれが壁となっています。「清く正しく美しく」という理想だけでは対抗できないのです。

戦前の日本の軍隊には、陸軍中野学校という情報収集部隊がありました。その実態は、畠山清行『秘録・陸軍中野学校』に詳しいです。しかし、重視はされませんでした。武士道で双方が名乗りあってから戦う伝統があり、スパイは卑怯だという感覚がありました。『秘録・陸軍中野学校』は情報を扱う学校の実録本です。情報部隊の誕生から戦争終結までよく取材して書いています。

CIAは、スパイ要員をホームページで公募しており、“CIA TODAY”にスパイの条件を書いています。

司馬遼太郎は、スパイを、密偵という倫理的にいかがわしい所業、いやらしい品性のものとして描いています。しかし、情報を重視してもいて、総論と各論で矛盾していることを言っている。

ヨーロッパと日本の情報の違いは大きいです。情報という感覚を失うと国は滅びます。日本は鈍感です。1994年陸上自衛隊の幹部学校。洋の目での情報の差はすごい。日本人は嫌悪感をもっています。

CIAでは「オペレーションオフィサー (工作官)」と呼んでいて、注

として「you could also call them spies」と書いてあり、認識の差がうかがえます。

つぎに、日本には、エージェント（秘密情報提供者）の保有という難題があります。相手の国に核心に触れる情報を持っている人を見つけて、リクルートし、その人を運用で引き継がなければなりません。リクルート、運用の両方にいろいろな問題をかかえています。

工作官エージェントの担当者（operations officer / case officer）の養成も大きな課題です。全人格的な資質が必要だからです。全人格的な資質とは、知、情、意、技です。

知とは、知識です。情報を引き出すための豊富な知識が高くなくてはなりません。普通の人ではだめです。見つかったらおそらく死刑です。エージェントをリクルートするには、相当の知が必要です。

情とは、感情です。金だけでなく、この人だったらと相手に思われるような資質です。

意とは、強い意志です。困難に直面してもくじけない意志です。

そして、技とは、尾行や語学の技術です。そのほかにもさまざまなことを要求されます。そういうものの訓練のレベルが高いことが必要です。

これらは、もちろん訓練で獲得されるのですが、訓練だけではなく、資質も大切な要素です。

### ●アナリスト（分析官）の養成

アナリストとは、工作官とは別の人で、情報の分析をする人です。多くの人数が必要です。

いちばん要求される資質は、複眼的思考力です。相手のことを理解し推理する力です。

そういう思考力は、ルース・ベネディクト女史の『菊と刀』（長谷川

松治訳) に一端をうかがうことができます。これは 文化人類学の基本でもあるわけですが、この本は、第二次世界大戦中に、日本人についての理解をしようというプロジェクトから生まれたものでした。そこにこんなふうに書いてあります。

「アメリカと日本は交戦中であった。そして戦争中には敵を徹頭徹尾こきおろすことはたやすいが、敵が人生をどんなふうに見ているかということ、敵自身の目を通して見ることが大切だ。」

そこで、この研究では、当時、米国にいた日系人にインタビューしたのです。

### ●徹底した基礎研究を行う。

同じような例として、Helen-Louise Hunter という人の: Kim Il-song's North Korea” という本をあげることができます。ハンターさんもルース・ベネディクトと同様の手法を使っています。まえがきによると、著者はCIAアナリストです。この本は、北朝鮮国民のおもしろく、恐ろしい日常生活についての綿密な分析が見られます。主婦はまず朝起きて水汲みに行く。上下水道がない。共同の井戸は遠く、冬は特に大変な仕事。そのほか男女交際、結婚の仕方について書いています。結婚は政党の仕切りの下で行われます。そして、兵役義務などについても書かれています。情報→分析→具体策という流れが守られています。

この本は、ソラーズ下院議員が「世界で共有するべき情報である」と主張して出版されることになりました。

現地を訪れたわけではなく、2世、3世のインタビューなどで情報収集、分析して書いたものです。

映画監督の雀銀姫（チェウニ）、大女優の申相玉（シンサンオク）という人たちをご存知でしょうか。二人は夫婦でした。当時、香港で飛行機の出発が遅れた際に騙されて北朝鮮に拉致されました。これは、

『闇からのこだま』（文春文庫）に詳しく書かれています。

はじめは映画の製作を拒否していたのですが、やがて映画製作の依頼に応じ、そのためには海外の監督らと意見交換する必要がある、と言って海外の映画祭に数回参加するうちに、ウィーン映画祭を利用して現地のアメリカ大使館に逃げ込んだのです。

金正日総書記はなぜ韓国の大女優と著名監督を拉致したのでしょうか。金正日は映画マニアだったのです。自分で映画が作りたい、しかし、北朝鮮には有能な女優、監督がいない。それはまああたりまえですね。自由な精神がないと芸術は育ちませんから。金正日は「ほしいものは何でも取ってやる！」という性格です。子どもと同じ。これを理解しておくことが大切です。日本人の拉致も同じような動機から起こっています。

### ● 国内情報の保全：収集と保全はコインの裏表

集める、守る

確実な情報管理が必要です。それには、心構えの問題とシステム構築の問題があります。

ITの時代になり、情報が外国のスパイに意図的に抜かれる事態がよく起こるようになりました。日本にはこれを罰する法律がありません。あってもゆるいのです。

昔、コピーが難しい紙を発明したり、厳重に管理したりしましたが、今はIT化が進みましたから、そこから情報が漏れないように、システムを作る必要があります。

国益に関する秘密（外交秘密スパイとか 北方領土の交渉&防衛秘密）の保護のため法整備が必要です。懲役1年などでは軽すぎます。

『刑法改正準備草案』（1961年法務省の諮問委員会発表）というものがあります。「外国に通報する目的で、日本国の安全を害する恐れのある

る防衛上または外交上の重大な機密を不法に探知しまたは収集した者は2年以上の有期懲役に処する」という内容のものでしたが、いまのところお蔵入りのままです。

このような法律は、ふたつの意味で必要です。ひとつは、実質的な国益の保護です。もうひとつは、国家の秘密が保護されるという象徴的な意味です。たとえば、銀行には金庫があります。金庫があるから、安心してお金を預けられます。それと同じように、この法律があるから情報をあげても大丈夫、と思われるという象徴としての意義です。情報は重要な財産でもあるからです。

### ●情報機関の創設—国家の“標準装備”

車の仕様に『標準装備』というものがあるように、国家の情報機関にも標準仕様が必要です。それが日本にはありません。

国家の情報機関の標準装備として、以下のものがが必要です。

- (1) 対外情報の収集・分析（インテリジェンス）：モデルは米国のCIA、英国のSIS（M16）です。
- (2) 国内における情報保全（カウンターインテリジェンス）：モデルは米国のFBI、英国のSS（M15）です。

### ●インテリジェンスオフィサーの理解

情報機関というものには誤解が多いですが、その本質を正しく認識することが必要です。）007みたいな目立ってカッコいいイメージとは逆のものです。どういう仕事をあげてみましょう。

#### (1) 労多くして報い少なき仕事

小説家のサマセット・モームはもとM16の職員でした。その作品『アシェンデン』（河野一郎訳）のなかに、こういうフレーズが出てきま



す。「君がこの仕事に取り掛かる前に、ぜひ心得ておいてもらいたいことが一つある。忘れないで覚えてくれたまえ。もし君が首尾よくやってくれても、君は感謝の言葉一つもらえないし、また面倒な事態が起こっても、助けは望めない—と、それでよろしいかな？」これは、この仕事の本質についています。実際にはお礼を言ってもらえるのですが。

## (2) 影の存在に甘んじる仕事

目立たないように生活することが求められます。英語では“low key”とか“hush-hush jobs”（内緒内緒の役所）と言ったりします。もとM16職員のグレアム・グリーンの『ヒューマンファクター』（宇野利泰訳）などをご覧になるとよいでしょう。

## (3) 人材が資本の仕事

要員は白紙の状態から集めることが必要です。日本では、役所間の出向人事でやろうとする考え方がまだまだありますが、出向ではいけません。出向では、優れた人は出しません。ですから志願制にして一生をこの仕事に捧げるくらいの勢いがある人を探さなければなりません。また、責任が重いです。警察官は向いていない。警察官は、「事件の解決で目立つということを経験してしまっています。情報機関の仕事は内緒で目立てません。仕事の内容は家族、奥さんにも秘密にするようなものです。

ですから、「官」プラス「民」で考えることが必要です。

とくに、待遇への特別配慮が必要です。たとえば、英国のSSの mobile surveillance officer はホームページで募集しています。募集している要員は、スパイ、テロの取り締まり、尾行要員です。彼らは分析官よりも、また国家公務員よりも年俸が高いのです。

尾行というのも大変な訓練が必要で、通常、尾行一件あたり。大人10数人以上で行うものです。

**(4) 個人プレーは禁止で、業務は細部まで組織が管理します。映画のように、自分の判断で動くということはありません。実際にそうやっちゃうと危険だったりもする。**

ジョン・ル・カレ『リトル・ドラマー・ガール』という小説では、テロ組織にイスラエルの女優スパイが入っていて、情報をとっています。それが組織できちんと管理されています。全体の責任体制は、内閣の直属組織として官房長官が指揮するのがいいと思います。そのうえで、組織の暴走を防ぐ仕組みとして、国会が関与し、特別委員会があり、そこでは、情報細部までは知らされぬが、包括的に管理するのがよいと思います。

#### 引用文献

フレデリック・フォーサイス 『神の拳 (こぶし)』 篠原慎訳 角川文庫

畠山清行『秘録・陸軍中野学校』新潮文庫)

ルース・ベネディクト『菊と刀』(長谷川松治訳) 講談社学術文庫

Helen-Louise Kim Il-song's North Korea Praeger Pub

崔 銀姫、申相玉『闇からの罅—北朝鮮の内幕』 文春文庫

グレアム・グリーン『ヒューマンファクター』(宇野利泰訳) ハヤカワ文庫

ジョン・ル・カレ『リトル・ドラマー・ガール』(村上博基訳) ハヤカワ文庫